

阿蘇地域自然再生推進計画調査
第1回 情報発信・合意形成に関する検討部会討議要旨

日 時：平成15年12月12日（金） 10：00～12:00

場 所：阿蘇いこいの村会議室

<出席者>

	氏名	所属等
座長 委員	坂元英俊	財団法人阿蘇地域振興デザインセンター事務局長
	宮口侗迪(トシチ)	早稲田大学教育学部教授
	永田瑞穂	崇城大学講師
	井 信行	産山村上田尻牧野組合前組合長、阿蘇フォーラム委員長
	和田真幸	阿蘇ホテル社長
	空野光治	農林水産省九州農政局北部九州土地改良調査管理事務所次長
	草野武夫	熊本県阿蘇地域振興局振興調整室長
	西山英樹	熊本県阿蘇地域振興局農林部農業振興課長
	(代理)	石原 健
事務局	新井正久	環境省九州地区自然保護事務所所長
	番匠克二	同 公園保護科長
	枝松克己	(株)メッツ研究所代表取締役社長
	赤松達也	同 環境計画室長
	角田理江	同 研究員

草原利用・環境教育等の推進に関する基本的考え方について

永田委員

- ・ 森林の多い中山間地域に30年程関わってきた立場から、次のような点を指摘したい。
- ・ これまで中山間地域では、行政によるハコモノ整備を主体とした予算がばらまかれてきた。しかし、施設そのものがうまく回っておらず、維持管理が大変な上、地元の中での対立を生み出し、それが原因で地域を出ていく人もいた。まじめな人ほど痛手を被った。
- ・ そうしたことから、地域の人達は「行政の言うことは信頼できない」という考えを学習し、施策のねらいだけ利用するなど、したたかさも身につけてきた。地元の人達の理解を得るためにどのような進め方をすればよいのか、この事業をうまく推進するためにもよく考えて欲しい。
- ・ 「草原利用」は、20年程前から雨後のたけのこのようにさまざまな形で進められて

きたが、今回の事業はそれらを統合させたという意味では評価できるものである。一方、草原の維持・保全や利活用といったこれまでの取り組みを検証することも必要。善意によるまじめな人は痛い目にあって、金儲け主義の人だけがいい目をみている可能性がある。

- ・ 資料3. 草原利用・環境教育等の推進に関する基本的考え方（案）について、言葉の使い方でいくつかの問題を感じる。
 - ・ まず、草原利用と環境教育をつなげてあるが、その関係がこの説明だけでは理解できない。
 - ・ 「草原利用・環境教育等とは」におけるの一つ目の説明で、「利用する」とあるが、何を利用するのかわかりにくい。
 - ・ また、「地域の人々に対し…自信や誇り、維持管理活動の継続への意識を高揚させる」とあるが、自信や誇りは自ら感じるものであり、「高揚させる」など外から一方的に押し付けるような言葉は使うべきではない。
- ・ 同資料フロー図について
 - ・ 草原を再生すると、豊かな生態系が回復し、景観的魅力が向上すると捉えているが、豊かな生態系というと、草原を雑木林に戻すことと考える人がいて誤解を招くおそれがある。ここでは、「草原の豊かな生態系や魅力の向上」とすべきではないか。
- ・ 基本的考え方には、抽象的な言葉が多いので、もう少し現実に即した表現を検討していただきたい。さまざまに解釈できる表現では、後々混乱を来す可能性もある。

宮口委員

- ・ 「豊かな生態系」とは、「他に見られない阿蘇の草原特有の豊かな生態系」ということだと認識しているので、この表現でもよいと思う。阿蘇には草原特有の「豊かな生態系」があり、草原を雑木林に戻すことには反対。
- ・ 阿蘇の草原の魅力は農家の人が牛を飼って、その営みを通じて他に類を見ない自然が維持されていることで、阿蘇は世界文化遺産への登録を目指してもよいと思う。いずれにしろ、牛を飼ってもらわなければならないのである。
- ・ いまの調査計画（案）は人間に対する視点が弱い。「農業・畜産業との両立」という言葉遣いは傲慢に思える。直接人が関わっているからこそ、阿蘇の自然が成立していることを原点とすべき。
- ・ モーモー輪地切りを例にすると、今の時代、土地をうまく利用するには、地元からの発想に加え、外からの知恵が必要だと思う。
- ・ 農水省の施策は、環境の維持・保全と農業振興の施策がリンクしていないことがある。そうならないためには、地元の発想をベースにすることが必要である。
- ・ 阿蘇での草原再生に関する取り組みは、これからの時代にあった日本の自然再生や農業を支援するシステムのあり方を検討する上で、象徴的な大きなテーマとなる。

また、外からの知恵を集めていくためにも、情報発信は重要な役割を果たす。

- ・ そういう意味で、草原利用と環境教育がメインに掲げられているのは、少し物足りない気がする。

和田委員

- ・ ホテルのほか、阿蘇ネイチャーランドという自然体験学習の会社の経営にかかわっている。年間 12,000 名くらいの利用客があり、うち、7,000 名くらいは修学旅行生である。
- ・ 熱気球などのプログラムもあるが、一番人気があるのは草原の中をマウンテンバイクで走ること。年間 200 万円で山を借りて行っている。
- ・ 草原をもっと活用したいが、牛を飼育している場でもあり、草原に人が入ることにより病気にかかる心配があるといった課題もある。
- ・ これまで九州の観光の目玉であったシーガイアやハウステンボスの集客力が弱まったこともあり、今、観光業者は阿蘇・くじゅう・高千穂に注目している。草原をうまく利用した観光で誘客が図れると確信している。
- ・ 草原を活用したモニターツアーについては、ビジネスに発展するような取り組みを望む。

井委員

- ・ これまでは体が元気であれば農業を行うことができたが、これからは行政や研究者などとの連携に基づいた農業が必要となっている。ただ、地域の人々がどれだけついていけるかが課題となっている。
- ・ アトピーの子供が阿蘇で過ごす調子がよいといったように、自然環境の中での人づくりの場として、また地元の人達がやさしいことで、来た人が癒される場として、阿蘇は都市に比べてすぐれた地である。
- ・ また、阿蘇は日本の一大畜産基地である。霜降り志向に対して阿蘇のあか牛は草を食べて育てている「安全」「安心」な牛であり、そうした意味からも阿蘇の草原は大事である。
- ・ 草原と雑木林との話が出ているが、観光面や地元の人々の誇りにつながるという意味でも草原は大事なものだと思っている。
- ・ 人と牛との関係の中で草原が維持されており、農業のサイクルの中で草原を維持しているということ、人間形成の場であり、食料基地であり、都会の人における憩いの場であるという価値を住民の人が認識し、誇りを持つ人が増えれば、阿蘇は自然と活性化する。
- ・ ただし、住民だけの力ではいろいろな取り組みは不可能であり、力を貸して欲しい。

坂元委員

- ・ 全国エコツーリズム大会 in 阿蘇の時、参加者から「阿蘇の草原はすごい」という声を聞いた。広告の看板が少なく、北海道では考えられないとのことだった。
- ・ 押戸石山に行ったとき、スティーブというエコツアー会社の人は、集落が近いにもかかわらず見渡す限り人工物がないことを評価してくれた。人に紹介することによって、当たり前と思っていたことの価値を気づかされるものだと思った。こうした取り組みを継続させていく必要がある。
- ・ ただ、草原に入るための注意事項や留意点など、阿蘇でのエコツーリズムにおける留意点を検討する必要がある。草原を歩くルート・ルールを決めることで牧野組合との合意形成が図られれば、エコツーリズムを推進できると思う。例えば、押戸石山の場合は、4箇所の牧野組合に草原を使わせてもらうための申請をした。
- ・ また、単なる自然観察を超えて、どう阿蘇の魅力を提供していくのかも課題であり、時間はかかると思うが、阿蘇のエコツーリズムに取り組んでいきたい。

空野委員

- ・ 農村地域には昔は（道路整備などハードな公共事業をもってくるような）ボスがいたが、今はそうした人はいなくなり、今後は公共事業のあり方・やり方を変えていく必要がある。
- ・ 環境教育のことを農水省では「食農教育」と呼び、出前事業などを行っている。環境という言葉は「土地改良法」でふれられ、そこでは「環境への配慮」という言葉が出てくる。
- ・ 環境教育のターゲットをはっきりと決めて、資料は分かりやすいものにすることが必要。

石原委員（西山委員代理）

- ・ これまでのハコモノ事業に関しては反省している。トップダウンの事業の進め方から「ダウントップ」（地域の盛り上がり、地域からの要請）が重要であるという時代を迎えており、ソフト事業を中心とした施策展開を図りたい。
- ・ 環境教育については、草原は牧野組合の人達をはじめ人々の営みがあってこそ維持されていることを掘り下げて欲しい。農業教育など、もう少し具体的な目標に絞ってもらいたい。その際、草原だけでなく集落・地域の農業や畜産業への理解を深めてもらいたい。
- ・ 我々も地産地消を中心に、農畜産業者の収入になる事業を考え実施している。ただ問題は、生産物の価格を維持向上させること。なお、あか牛の価格は回復傾向にある。
- ・ 最近、農政調査会が阿蘇における中山間地直接支払い制度について調査を行っている。

宮口委員

- ・ この事業の難しいところは、地元の牧野組合というのが、畜産をがんばっていこうという意識の人だけの組織ではないことにある。
- ・ 井さんの話にあった、地元を誇りを持った人を増やすためには、外との交流が不可欠。地元の人々の誇りや意識を高揚させるには、じっくりと車座になって情報交換をしないとだめである。

井委員

- ・ 草原を案内する人や牧野を提供した人にお金が落ちるなど、直接、地元の人に利益が出るしくみがあると受け入れやすくなる。
- ・ 集落には多かれ少なかれ派閥があり、何か新しいことをやろうとしてもなかなかうまく進まない。いまの農村が活性化されない悪い面だと思う。そこをどうにか変えないといけない。みんながやる気を出せば、前向きに進んでいくであろう。

拡大ワーキング「牧野の開放・ふれあい利用検討会（仮称）」について

宮口委員

- ・ 言葉の問題として「牧野の開放」と謳っていいのか疑問であり、反発や誤解を招くおそれがある。
- ・ 人はヒアリングを受けただけでは成長しない。ヒザをつき合わせた話し合いでけんかしないと成長しない。そうした場・機会をもつべきではないか。同じ壇上からでも「そうだ」と納得してもらうための、日ごろからのインプットがないといけない。
- ・ さらに、井さんのように進んだ人を何人も見つけて、その人たちから今回の取り組みについても情報を広げていく必要がある。

坂元委員

- ・ 夜なべ談義など、本音が出るような仕掛けが必要ではないか。

情報発信と共有について

坂元委員

- ・ 利用とともに草原を維持するための情報を、同時進行的に発信する必要がある。

新井所長

- ・ 草原を体験してもらうことによって、草原維持のための合意形成を図っていきたい。
- ・ 環境教育の推進に関しては、自然案内人協会や井さんのような畜産農家、牧野組合の方々との連携が必要と思っている。
- ・ 情報発信については、受け手の側の立場や意識などに配慮した内容、表現としたい。